



●記念式典・祝賀会 2021年5月1日(土)

中之島にて周年記念の式典・祝賀会を開催

●箕面新キャンパス関連事業

箕面新キャンパスの竣工を記念した式典、大阪外国語大学に関連するイベント等

●中之島キャンパス再開発関連事業

キャンパス再開発を進める中之島に関連したイベント等

●国際シンポジウム関連事業

海外からゲストを招き、グローバルな内容で展開するシンポジウム等

●産学官連携イベント関連事業

大阪大学の最先端の研究を紹介する、産学官が連携して実施するイベント等

●学生イベント関連事業

周年記念大学祭や学生が主体となって展開するイベント等

●記念出版・展示関連事業

本学の歴史を紐解く年史の刊行や歴史展の開催等

上記の各種事業は予定であり、変更する可能性があります。また、詳細は事業計画が決まったものからホームページに掲載しますのでご覧ください。

大阪大学創立90周年・大阪外国語大学創立100周年記念 各種事業

記念すべき2021年を迎えるにあたり、地域や企業の方々に向けた魅力ある様々なイベントを、本学発祥の地である中之島、さらに吹田、豊中、箕面の各キャンパスにおいて開催を予定しています。また、この年には、箕面新キャンパスの移転事業が完了し、加えて、中之島キャンパスの再開発事業も進行中であることから、それらに関連したイベントも計画しています。今後、周年事業のための寄附募集金額の設定など、事業計画が本格化していきます。「想い つなげる つむぎあう」とあるように、周年事業を節目として、その次の1年、10年、100年へとつないでいけるよう、ともに歩んで参りましょう。

ロゴマークについて

2021年に創立90周年を迎える大阪大学、そして創立100周年を迎える大阪外国語大学を未来に向かう鳥として表現した。

鳥の体の直線は未来へ向かうタイムラインを表した。翼と胴体の交わりにより阪大・外大の統合を象徴し、外大という大きな翼によって阪大が大きく未来に向かって飛躍する様を表現している。

また、滑らかな曲線を多く用いた意匠とすることで、二つのリボンが結びついて風にたなびく姿も含めており、周年事業のコピーである「想い つなげる つむぎあう」を表現した意匠とした。

2021年は、大阪大学創立90周年、大阪外国語大学創立100周年、中之島キャンパス再開発、箕面新キャンパスへの移転などといった大阪大学にとって記念すべき年であり、「想い つなげる つむぎあう」というスローガンは、そこに向けて今を生きる私たちの気概を表現しています。

「想い」には、懷徳堂、適塾といった原点、大阪帝国大学、大阪外国語学校設立の経緯、そこから今日までの発展を支えてこられた先達と伝統に敬意を払うことを表しています。その想いをもった私たちは過去と現在と未来とを「つなげる」役割を担っています。それと同時に、個々人の様々な「想い」を「つなげる」ことによって、想いは共鳴し、響きあって新たなハーモニーを作り出します。

現在は、変革の時代であり、構成員それぞれが置かれた立場で、志をもって事に当たる必要があります。そのためには、個人での頑張りに加え、互いに協力し支えあうことが欠かせません。未来志向で互いが影響し合い、まさに協奏する様を「つむぎあう」と表現しました。

今回のフレーズは、大阪大学創立80周年記念事業のスローガンである「原点へ・未来へ」のオマージュであり、なおかつ「つなげる」には共創、「つむぎあう」には協奏の意味も包含させ、大阪大学が創立90周年に向けて進むべき道筋を示しています。また、3節に区切り、それぞれの言葉を3音、4音、5音とリズムを重視したコピーとし、親しみやすく、覚えやすいものとなるようにしました。

大阪大学を創立100周年、その次の100年、さらにずっとその先の未来にもつなげていくために、伝統に敬意を払い、変革をおそれず未来に向かっていく私たち構成員の姿勢を表現したスローガンです。

それぞれの、始まり。 大阪大学と大阪外国語大学

2021年に、創立90周年を迎える大阪大学と、
創立100周年を迎える大阪外国語大学。

ともに激動の時代に大阪に誕生した大学の始まりをご存知でしょうか？
今回の特集では、かつての学報に連載された脇田修名誉教授の「大阪大学夜話」や
大阪外国語大学70年史等をもとに、それぞれの創設譚を紐解きます。

1931

大阪帝国大学医学部*1

上八校舎の俯瞰図*6
(仏語部9回若西一郎氏提供)

大阪大学夜話 第一話 『地域に生き』

大阪大学 名誉教授 脇田 修

大阪大学には「地域に生き世界に伸びる」という標語がある。阪大人の多くは意識しておられないかも知れないが、世界はともかく「地域に生き」というのは、いかにも大阪大学らしい特色を示すものである。

なぜ、これにこだわるかということ、ここで書いておきたい。1886年(明治19年)の帝国大学令には、旧帝国大学は「国家ノ須要ニ関スル學術技芸ヲ教授シ、及其蘊奥ヲ攻究スルヲ以テ目的トス」とあり、戦前の国家主義の傾向を反映して、国家のために必須の学問をおこなうことを定められていた。したがって建設地は地域を考慮したもの、特定の地域を重視していない。また戦後にも旧帝国大学や有力私立大学の場合には、日本・世界を志向しても地域性を考えるのは少ない。東京大学や京都大学などは首都とか古都

とかいうが、所在地として以上のことを考えているとは思えない。大阪大学が地域を重視するのは、その意味で特色のあることであった。

それは大阪帝国大学の成立史からきていると、私は思っている。東京・京都・東北・九州・北海道・名古屋と創設されてきた旧帝国大学は、関東・近畿など日本の地域区分にあわせて配置されている。近畿地方だけが二校なのである。それもあつて大阪帝国大学の成立は難産であつた。なぜなら近くに京都帝国大学があり、大阪には改めて必要がないというのが、当時の政府関係者の意向であつたからである。

近世から江戸・大坂・京都は三都といわれて、それぞれ特色のある都市であつたが、近代では大阪・京都は近接して存在するために、なにか施設をつくるにも、文化は京都、経済は大阪と、すみわけが考えられたようである。たとえば国立博物館・帝国大学は京都におかれたし、第三高等学校も大阪から京都へ移転している。

そのなかで大阪帝国大学を創設でき

たのは、大阪の政・財・学各界あげての熱意であり、京都に遅れること35年後に成立したのであつた。またこのような事情から文科系学部の成立は遅く、1948年(昭和23年)につくられたのであつた。

結局、大阪帝国大学は、1931年(昭和6年)医学部・理学部ついで33年工学部を設け、さらに戦前に微生物病研究所・産業科学研究所・音響科学研究所などを創設していった。そのさい大阪地域の特殊性を考慮して「諸産業の基礎的研究」「応用諸科学の研究」に重点をおくとしている。そして母体となつたのは府立大阪医科大学・塩見理化学研究所と官立大阪工業大学で、大阪府などの施設を移管したのである。そこにはまた竹尾結核研究所・山口厚生病院など篤志家の寄付にかかる施設もみられた。

このように大阪帝国大学は大阪の人々の希望と熱い援助によって創設されたのであつた。本学が地域を重視するのは当然といえよう。

大阪大学夜話 第二話

『初代総長 長岡半太郎』

大阪帝国大学総長には、東京大学名誉教授・理化学研究所主任研究員の長岡半太郎が就任した。大阪では大阪医科大学学長楠本長三郎を推す空気が強く、東京では文部省などで前文部次官栗屋謙の名があがっていた。この両者に迫られた文部大臣田中隆三が、これを避けて、長岡を口説いたようである。

長岡は原子核物理学の世界的学者で、なかなかの豪傑であった。就任の条件として、研究のため東京に滞在する、次期総長を早く決定する、ことをあげている。実際、彼は東京にいて、毎月中旬の五日間だけ来阪して、大学行政にあたった。当時の総長は、現在の総長ほど忙しくはなかったと思うが、それにしても交通の便は悪かったし、大阪に生活の基盤をもたないで、よく勤まったものと思う。よほどうまく時間を使ったのであろうか、これを支える事務局は大変だったろう。

はじめて彼は長く勤める気持ちのないことを示していたが、1931年5月1日、総長に就任し、1934年6月22日依願免と、約3年間で総長をやめた。短い期間であるが、しかし彼はポイントを押さえて、大阪大学の基盤をつくった。

長岡は、まず独創的研究を重視し、他人の成果を説いている「村夫子的教授」を排斥した。この彼の意図は、新設の理学部を例に取れば、よく貫かれ、すぐれた人材、それも若手の研究者を集めたことによって、めざましい成果をあげたことは知られている。

また財源についても、現実的な意見をもっていた。3学部成立式・理学部校舎落成式での式辞のなかで、この校舎も15年・20年すれば、学問の進歩によって陳腐だといわれるだろうといい、このような研究の進展に応ずる用意が必要として、仙台の斎藤報恩会を例にひきつつ、大学への資金援助を願っている。塩見理化学研究所の例に触れなかったのは、なぜかわからないが、率直に資金の必要を語っている。



開学式において式辞をよむ長岡総長（医学部講堂 昭和6年5月1日）*1

また第1回入学式では、新入生265名にひとりひとり握手をするという異例の式をおこなった。当時の帝大生はエリート中のエリートであり、旧制高校生の段階から紳士として扱われてきたが、親しく総長の激励をうけて、学生の気分は高揚したであろう。

長岡の文章によると、「総長は大学の事務官長のようなもので、学問とは余り関係のない仕事をする」とし、大学制度や授業方法についての偉大な改革をおこなうことはむずかしい、法規の鉄網に囲まれた檻にいるようなもので、動物園の獅子や虎のようなものだ、と記している。いかにも長岡らしい感想だが、彼が初代総長であったのは、大阪大学にとって、やはり大きい意義があったと思う。

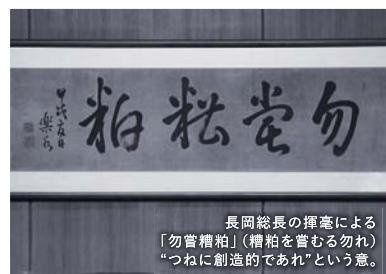
● 脇田 修（わきた おさむ）プロフィール

1931年大阪市生まれ。京都大学大学院博士課程単位取得。京都大学文学博士。大阪大学文学部教授、文学部長、評議員などを務める。94年大阪大学名誉教授。大阪大学出版会会長、大阪歴史博物館館長などを歴任。

出典：学報No.522～523（1997.7～8）



初代総長 長岡半太郎



長岡総長の揮毫による「勿嘗糟粕」（糟粕を嘗むる勿れ）“つねに創造的であれ”という意。

思い出深き
東京ステーションホテル
34番室

元大阪医科大学幹事
大阪帝国大学事務官
西尾 幾治

同氏編『大阪帝国大学創立史』1935年 より

「ステーションホテル」の34番室には楠本学長が不安の面持で頑張って居られ、議場より来る刻々の報告に青くなったり赤くなったりして結果を待つて居られる。昭和6年3月25日の夜も12時を過ぎた頃、貴族院無事通過の電話で安心された所へ、知事さんを先頭に、阪田、木間瀬両氏もホテルへ帰って来られた。私もこの時ばかりはホテルの階段を3階まで夢中で駆け昇り、34番室へ飛び込んで、学長に議院の状況を詳細報告しやうと思ったが、たゞもう嬉しくて知事さんや学長の顔を眺め、暫くは一言も発し得なかった。ホテルの学長受持のボーイまでが喜んで、早速ビールの用意をしてくれたので、一同打揃って目的達成を祝する為め、乾盃して記念の撮影を済ませたのが午前2時過であった。顧みればこの34番室は、学長が外国から帰られて、横浜からすぐにこの部屋に落付かれ、知事さんや木間瀬、阪田両氏、小沢学長代理にも面会され、亜米利加から持帰られたメロンを食べて、帝大



創設運動の経過を聞き、留守中知事初め各位が活動せられたことに対し、深甚の謝意を表されて直に文部省に出頭、学長としての立場から帝大創設の熱烈なる要望をされたのである。そして翌年（マ、翌月カ）3月末迄の約50日間はこの部屋に陣取られ、木間瀬さんは常にこの室に同宿され、知事さんや阪田さん、関市長さん其他有志諸公も随分度々来合され、一時は大阪帝大創立事務所の観があって、光輝ある大阪帝大創設には最も因縁深い部屋である。

出典：大阪大学五十年史 通史

写真集 大阪大学の五十年*1

大阪帝国大学創立史*2



大阪帝国大学開学式*2



大阪帝大創立案貴族院通過の夜思出深き東京驛ホテルの乾盃（昭和六年三月二十五日）*2

大阪外国語大学(大阪外語、大阪外専…)の「むかし、いま」

「咲耶」会報No.16(2005)巻末特別付録から抜粋(一部を修正しています)

東京外国語大学が、明治6(1873)年に外国語を専門とした官立の東京外国語学校として発足後、明治18(1885)年に東京商業学校に合併された。その後、明治30(1897)年に高等商業学校附属外国語学校として再興され、2年後の明治32(1899)年に東京外国語学校として独立。

これに遅れること22年。大阪外国語大学は、大正10(1921)年、当時の大阪の財界人が持っていた先見性、国際性に加えて、公共に奉仕する矜持を持った一個人によって建てられた国立の学校である。当時、貿易、物流で活躍された林 竹三郎氏の『公共事業に寄付』の遺言により、妻の林 蝶子さんは、ときの文部大臣・中橋徳五郎の提案『国際人養成の外国語学校を大阪に』を受けて、大正10(1921)年に創設費として100万円を文部省に寄付された。そして翌年の大正11(1922)年11月11日、大阪・天王寺区上本町八丁目(元の旧制天王寺中学校敷地跡)に創設された大阪外国語学校は開校式を迎えた。

林 蝶子さんは、その功績で大正13(1924)年に勲三等瑞宝章を受章され、昭和20(1945)年に亡くなられた。校舎創設から24年を経ていたが、一番残念なことは、その初代校舎が空襲で灰燼

に帰し、生徒たちは元高槻工兵隊の兵舎に引っ越していたことであろうか。その後、再び上八校舎、そして昭和54(1979)年現在の箕面キャンパスに移転した。

この80有余年の長い歴史のなかで名称も開学当時の大阪外国語学校から昭和19(1944)年には大阪外事専門学校に改称され、そして昭和24(1949)年に大阪外国語大学が設置された。また創立時は、わずか6カ国語でスタートしたが、現在では24カ国語に増加。学科も平成5(1993)年から国際文化学科および地域文化学科の2コース制が導入され、時代のニーズに対応した大学として弛まぬ改革への努力で、その存在価値を維持し、発展し続けている。

協力：大阪大学外国語学部・大阪外国語大学同窓会「咲耶会」
出典：「咲耶」1992年10月号*3
「咲耶」No.13(2002)*4
「咲耶」No.16(2005)巻末特別付録
「あけぼの」*5
(大阪外国語学校 昭和3年 卒業アルバム)
「大阪外国語大学70年史資料集」*6
参考文献：「大阪外国語大学70年史」

昭和初期の上八校舎正門*6
(仏語部12回桂勝氏提供)



林 蝶子女士*4



昭和15年頃の上八校舎*3



野球校内大会優勝シテ*5



昭和二十二年、大阪外専、高槻校舎正門*6
(中国科26回内藤勝幸氏提供)



校旗*6
(仏語部12回桂勝氏提供)



或ル雨上リノ日、心齋橋ラブラツイテ
松竹座ノ前デ語ツタコトガアツタガ……*5



スペイン文豪ビオ・バローハの大作「霧ノ都」講義*5



インドネシア語劇*6
(大学ロシア語学科1回今市睦浩氏提供)



体育祭での仮装行列*6(仏語部12回桂勝氏提供)



昭和十年頃、阪急梅田駅前の市電と市バス*6
(仏語部12回桂勝氏提供)